

総合人間科学系 全学教育センター

ベックフォード、ダンディズム美学

18世紀の終わりから19世紀前半にかけて、文学、建築、造園、音楽、絵画・稀覯本や家具調度類の蒐集など、さまざまな芸術分野で才能を発揮した英国の文人ウィリアム・ベックフォードの生涯と作品、および近代的存在方式としてのダンディズムの人間像と精神美学を対象に研究を行っています。また、これら主題に関連して、アーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ作品を教材に用いたり、柴田錬三郎の眠狂四郎シリーズについて論考を発表したりもしています。

言語教育部門



山口 和彦 教授

金沢大学法文学部文学科卒業、同大学院文学研究科修了後、信州大学教養部、同組織維学部を経て、信州大学総合人間科学系全学教育機構に所属。現職に至る。

研究から広がる未来

精神の貴族と称することもできるダンディーの生きざまと精神像には、時代や風土を超えて受け継がれるべき人間的・倫理的価値が含まれています。同時に、節度と品位を重ねるダンディズムの様式感覚のうちに、表情や挙措動作といった人間の身体表現だけでなく、言語表現とも不可分に結びついた表現美学を見てとることができます。

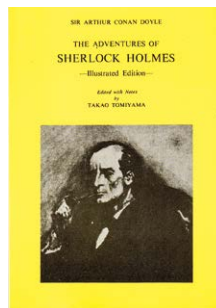
卒業後の未来像

教養を“人の心がわかること”と定義することができるとするれば、大学での学びは“人や環境、あるいは自然について、それらの心がわかる人材”を育てることにもつながっているといえるでしょう。



12 Fonthill Abbey, Wiltshire

ベックフォードが造り上げた風景庭園とフォントヒル・アビー (Reay Tannahill, *Regency England* (London: The Folio Society, 1964) の *Illustrations 12 Fonthill Abbey, Wiltshire* より)



C・ドイル『まだらの紐・赤髪連盟』(英光社、2015年)の表紙



柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控(一)』(新潮文庫刊)の表紙